

「いろいろな場で弾く経験を積みかさねて」

海老彰子『マスタークラス in sonorium』

文◎森川玲名 写真◎酒寄克夫

東京・永福町の住宅街に昨春オープンした『sonorium (ソノリウム)』は、建築家青木淳設計、音響は永田音響設計が手がけ、本格的に音楽が楽しめる室内演奏ホールである。しかも常設されているピアノは、スタインウェイのグランドピアノD274。日本を代表するピアニスト、海老彰子さんが昨

年の秋に選定し、12月に開催された選定記念リサイタルでは、ショパン、リスト、ベートーヴェンの作品などを演奏。豊饒で、多彩な音色に包まれる極上のひとときを堪能した。

そして今春、ソノリウムは海老彰子による『マスタークラス in sonorium』を主催し、3月14日は、金子三勇士さん、深見まどかさん、泉ゆりのさんが受講。翌15日のマスタークラスに足を運んだのだが、ただ単に注意点を指摘するのではなく、常に受講生に問いかけながらのレッスンは内容が濃く、表出される音楽が少しずつ変化してくるのが伝わってきた。

ベートーヴェン『創作主題による6つの変奏曲』へ長調作品34のレッスンに臨んだ土井千咲綺さんは、

「以前、このホールで聴かせていただいた海老先生の演奏にあこがれて、ぜひ見ていただきたいと思い、受講しました。各部分のイメージやキャラクターを作る音色の出し方なども勉強になりましたし、楽譜をもっと細かいところまで読みこみながら、すみずみまでよく音を聴いて弾かなければいけないことも、わかりました」

モーツァルトのピアノソナタ第11番

イ長調K331でレッスンに臨んだ竹井詩保子さんは、

「先生の演奏は、常に細胞レベルで動かされます。音楽に忠実であり、自然であることが、音楽を生き生きましたものにするのだと改めて実感しました。それに、いろいろな角度から見てください、総合的に必要なことをおっしゃってくださいるので、前に進むエネルギーもいただくことができました」

また、海老さんからは、

「このホールは響きが素晴らしいので、弾く人も、聴く人も、教える立場の人にも皆、いろいろな面で勉強になりますよね。ですから今回のレッスンは、とても良い経験になったと思います」

との感想とともに、

「音楽的な表現をするには、どのように弾いたら効果的か、その技術を磨いていくことが大切です。そして、国際舞台に出ていくのであれば、もう少し積極的に、音楽に対する熱を伝えてほしいと思います」

と、若い方々へのメッセージも届けられた。

レッスン終了後の「レクチャー&ミニコンサート」では、海老さんが、シューベルトのピアノソナタ第18番ト長

調D894作品78の第1楽章と第2楽章、ショパンのスケルツォ第3番嬰ハ短調作品39を演奏。聴衆を大いに魅了し、引きつづきおこなわれた『ホール』の音響と演奏の関係。本番演奏のために」と題したレクチャーでは、聴く耳を養うことの大切さや、1台1台異なるピアノと仲良くなるためには、リハール時間の過ごし方も重要であることなどが語られていった。そして、質疑応答の後、アンコールの声が上がリ、ショパンのノクターン第1番の演奏で、2日間にわたるマスタークラスが締めくくられた。



竹井詩保子さん



土井千咲綺さん



客席から質問も飛び、なごやかにおこなわれたレクチャー



レクチャー&ミニコンサートではシューベルトとショパンを熱演